

学校犬バディの示すもの

－学校における動物介在教育（AAE）の可能性－

Possibility of Animal Assisted Education that school dog Buddy shows

今 野 洋 子 尾 形 良 子
Yoko IMANO Ryoko OGATA

抄 録

国際的動向に比べ、日本において動物介在教育は普及していない現状にある。本研究では、2003年度より、立教女学院小学校で学校犬バディによって推進されている「動物介在教育（AAE）」について概観し、「動物介在教育（AAE）」の日本の学校教育における推進の可能性について検討することを目的とした。

学校犬バディの誕生の契機、学校犬の条件、バディ・ウォーカーの活動、バディとの学校生活、保護者の反応、いのちのつながり等の視点から、バディによる「動物介在教育（AAE）」をみた。その結果、効果の大きい教育プログラムであること、責任の所在を明確にすることが必要であること、実際に活動をみることで賛同者を得られることが明らかとなった。つまり、今後、日本において、学校犬の誕生は十分可能であり、改めて「動物介在教育（AAE）」が学校本来の機能を回復させる大きな力となることが考察された。

I. はじめに

現在、犯罪の低年齢化・凶悪化は世界中で大きな問題となっており、心を育てる教育の必要性が叫ばれている。そのアプローチの一つとして注目されているのが、動物介在教育（AAE：Animal Assisted Education）である。

2001年リオデジャネイロで開催された「人と動物の相互作用国際学会（IAHAIO：International Association of Human-Animal Interaction Organizations）」において、「動物介在教育（AAE）」は「学校において動物と接する活動」と定義された。主に、獣医師やボランティアなどで構成されるチームが小中学校へペットを連れて訪問することを通して、子ども達に動物とのふれあいを推奨し愛護精神を培う教育と、学校での動物飼育とを総称¹⁾したものである。

一方、動物介在教育を進める上で不可欠なのは、介在される動物が動物福祉の視点から見ても適切な方法で介在し、安全に飼育されていることである。このような観点に立ち、同2001年

に、「動物介在教育実施ガイドライン」が宣言¹⁾された。

また、2007年10月、東京で開催された「人と動物の相互作用国際学会 (IAHAIO)」において、学校カリキュラムにコンパニオンアニマルを介在させる「動物介在教育 (AAE)」を推進することが提言¹⁾された。学校における「動物介在教育 (AAE)」プログラムが子どもの道徳的、精神的、人格的な成長を促し、さまざまな場面に動物を介在させることで学習機会の向上をする等の効果等¹⁾が認められてのことである。

このような国際的動向に比べ、日本において動物介在教育は普及していない現状にある。本研究では、2003年度より、立教女学院小学校で学校犬バディによって推進されている「動物介在教育 (AAE)」について概観し、「動物介在教育 (AAE)」の日本の学校教育における推進の可能性について検討することを目的とした。

Ⅱ. 研究方法

学校犬バディによる「動物介在教育 (AAE)」の推進者である立教女学院小学校の聖書科 (宗教科) 主任、吉田太郎氏による「子どもたちの仲間 学校犬バディ 動物介在教育の試み」²⁾ (写真1参照)、バディの学校生活の様子についてのブログ「動物介在教育の試み Animal Assisted Education」³⁾、HP「Child Resarch Net 子どもは未来である」のレポート「動物介在教育 (Animal Assisted Education) の試み」⁴⁾、DVD「Animal assisted Education St. Margaret's Elementary School Buddy 2003-2009」⁵⁾について内容分析を行った。

2009年9月14日 (月)・15日 (火)、立教女学院小学校を訪問し、吉田太郎氏へ聞き取り調査・子どもたちおよび保護者への聞き取り調査・ビデオ撮影で収録した観察内容について分析した。

なお、訪問日程・内容について、表1に示した (表1参照)。

表1 立教女学院小学校訪問日程

月 日	時 間	内 容
9月14日 (月)	13:00 13:00~17:30	立教女学院小学校着 教頭先生に挨拶 吉田太郎教諭より動物介在教育実践までの取り組みについて聞き取り バディウォーカーの活動の様子を見学 バディウォーカーの子どもたちから聞き取り
9月15日 (日)	8:05 8:15~16:00	立教女学院小学校着 校長先生に挨拶 職員朝会で紹介してもらい、チャペルでの礼拝に参加 授業を見学 (吉田教諭による情報の授業と「聖書科」の授業。「聖書科」の授業にはバディと子犬も参加) 保護者からも聞き取り

Ⅲ. 学校犬バディの誕生と活躍

1. バディ誕生に至るまで

2002年春、吉田太郎氏が不登校となっていた児童の学校への復帰を目指して関わっている時、児童が「学校に犬がいたら、楽しいだろうなあ…」²⁾とつぶやいた。このことばが学校犬バディを誕生させる契機となった。

「不登校になってしまう子どもにとっては、ともすれば学校という場所は友達との人間関係や勉強、競争などで疲弊してしまう場所でもあるのだ。そんなときでも、大好きな犬と一緒にあれば心強いし、安心できる。休んでいた学校にもう一度足を運ぶ勇気を与える。子どもたちの不安や緊張を和らげ、『たのしみ』や『やさしさ』を与えてくれる存在として犬が学校にいてくれれば、きっと救われる子どもたちがたくさんいるだろう。そんな思いから『学校に犬を…』というアイデアが生まれた²⁾のである。

このアイデアを実現させるまでに、校長との話し合い、専務理事の了承、教員会議での提案と承認というプロセスに加え、学校犬の犬種の選択、入手準備等、多くの過程を経ることになった。

一方、吉田太郎氏が学校犬を考え始めた当時の海外に目を向けると、学際的にも「動物介在教育 (AAE)」が注目された頃にあたる。

2001年、同時多発テロ事件の影響を受けながらも『人と動物－21世紀へのグローバルな展望』をテーマとして挙行された「人と動物の相互作用国際学会 (IAHAIO)」で、学校におけるペット飼育やコンパニオンアニマルとの触れ合いに関するガイドラインをまとめた『リオ宣言』が発表された¹⁾。

このリオ会議において、オーストリア・ウィーン大学 Kurt Kotrschal 教授は『子どもの社会性について犬がサポートする役割』に関する研究で、「イヌを飼育したクラスでは子どもたちに自主判断能力が高まり、集中力が出てきた。攻撃的な行動が減り、けんかが起こった際に仲裁に入る児童が非常に増え、児童同士の親睦が深まった」ことを報告⁶⁾した。

また、広島大学大学院博士課程学生、木場有紀氏は『日本の幼稚園における動物飼育に関する調査：教育的効果と今後の課題』(1999年度 CAIRC 研究奨学金助成対象)において、「ペット飼育を行うことで園児に動物との触れ合い、思いやりや命の尊さを伝えたい、と考える幼稚園が70%以上にも上る反面、問題も少なくない」ことを指摘し、「動物の生態をよく把握しないまま飼育し、飼育動物の福祉の低下を招いているケースもある」として飼育マニュアルの必要性を示唆⁶⁾した。

なお、「動物介在教育実施ガイドライン」⁷⁾について、資料1に示した。

資料1

- I A H A I Oは、学校でのペット・プログラムに関わるすべての人々と団体、すべての学校および教師に、以下のガイドラインを考慮に入れて、プログラムを行うことをすすめます。
1. 動物介在教育に関するプログラムでは、教室で動物に触れることを認めなければなりません。また、学校の規則や施設によってはこれらの動物は下記のいずれかの条件を満たしている必要があります。
 - a) 校内において適切な環境のもとで飼育されている。
 - b) 教師によって学校へ連れてこられる。
 - c) 訪問プログラムという形態のもと、飼い主同伴で訪問する。
 - d) 障害を持つ子どもに介助犬として同行する。
 2. 子供とコンパニオンアニマルに関するいかなるプログラムも下記の条件を満たす必要があります。
 - a) プログラムに関わる動物が
 - ・ 安全（適正があると認められるか、きちんと訓練されていること）。
 - ・ 健康（獣医師による健康診断を受けていること）。
 - ・ 学校の環境に適応する準備ができている（たとえば、子どもに慣れている、移動に慣れている、など）。
 - ・ 適切に飼育されていること（学校でも、家庭でも）。
 - ・ 動物飼育に対して知識のある成人の管理下にいること（教師または飼い主）。
 - b) 学級内の子どもの安全、健康、感情を尊重すること
 3. 上の基準を満たしたコンパニオンアニマルを介したプログラムの実施者は、教室で飼育する動物を飼う前、または訪問プログラムを実施する前に、学校当局と保護者の双方に対して、動物介在活動の重要性について知らせ、理解してもらいましょう。
 4. 明確な学習目標を定義する必要があります。それには、以下の事項が含まれている必要があります。
 - a) 学校カリキュラムの様々な場面で子供たちの知識や学習意欲を向上させること。
 - b) 人間以外の生き物を尊重する心、かつそれに対する責任感を育てること。
 - c) 子ども一人一人がそのプログラムに関わっているかどうか、また、子供によって感情の表し方は違うということを考慮に入れること。
 5. プログラムに関わる動物の安全性と福祉はつねに保証されなければいけません。

出典：「Letter from CAIRC」⁶⁾

2. 学校犬の条件

試行錯誤の末、吉田太郎氏が「気性が穏やかで人になつきやすいこと」「訓練性能が高いこと」を条件²⁾に、数百種類を超える犬種の中から、学校犬として選んだのはエアデール・テリアであった。獣医師でもある兵庫県の繁殖家の協力により、旧東ドイツから輸入した血統で日本警察犬協会でも優秀な訓練成績を修めている犬の子を得ることができた

ブリーダー探しから入手にいたるまで、しつけ、日常および休日の世話は全て吉田氏が責任を持って担当している。決して、犬好きの先生が自分の犬を学校に連れて行くわけではない。

2003年3月11日生まれのエアデール・テリアの雌は、バディ（Buddy）の名をもらい、学校犬となった。バディ（Buddy）は、男の子の名前であるが、「相棒・仲間・友達」を示すことばであることから、つけられたものである²⁾。

2003年5月26日より、学校犬としてデビューし、子どもたちとともに歩んできた。（写真2参照）

2009年9月に筆者らが学校訪問したときには、娘のアカちゃん（当時のコールネーム、後に「リンク」と命名された）連れで出勤しており、アカちゃんのやんちゃぶりとアカちゃんをし

つけるしっかりした母親バディ (Buddy) の賢さが印象に残った。しかし、「子どもたちの仲間 学校犬バディ 動物介在教育の試み」²⁾では、バディ (Buddy) のしつけに奮闘する吉田氏の姿が見える。バディ (Buddy) の学校でのマナーの悪さに過敏になっている吉田氏に、知り合いの獣医師が「あまり厳しく訓練を入れてしまうと、犬がロボットみたいになってしまいますよ。命令に従うから、いい犬だと限らないのでは？」²⁾という示唆を与えた。また、「バディちゃんは、もう十分にやさしく育っていますから大丈夫ですよ。せっかく学校で子どもたちと一緒に育っていくんですから、かえって失敗したり、怒られたりする方が犬らしいじゃないですか」²⁾ということばに、吉田氏は、学校犬としてのあるべき姿を改めて考えた。エアデール・テリアは外見上の愛らしさに加えて、「人間にいちばん近い犬」と評される個性的なキャラクターを持つ犬である。様々な個性を持ち、その個性を生かしながら育つ子どもたちのいる学校で、バディ (Buddy) の個性を生かし育てるのでなければ、子どもの仲間である学校犬とはいえない。

また、訪問中に幾度も、バディ (Buddy) の洞察力と的確な行動、豊かな才能に感心させられることがあった。

まず、初対面のとき、筆者らのうち犬好きの方には膝に前足を乗せ、「いらっしゃい」の挨拶としてぺろぺろと顔を舐めたが、犬嫌いの方には、積極的な挨拶はせず、目を合わせていただけであった。しかし、2日目になって、犬嫌いの方も「バディ (Buddy) ちゃんのことは好き」という気持ちになったのを感じ取り、さっそく膝に乗って舐めて挨拶を行った。

授業参観の折にも、少し屈託のありそうな子どもに自然にそっと寄り添う姿が観察され、人の心の機微に敏感に反応し、瞬時に対応する能力に驚かされた。

3. バディ・ウォーカー

バディ (Buddy) は、教員室の一角に専用の小部屋、通称「バディ・ルーム」²⁾を与えられ、そこで過ごしている。「バディ・ルーム」には、犬の写真や小物が飾られ、本棚やケージが置かれている。

訪問した際には、窓からバディ (Buddy) の様子を覗いては、「いる、いる！」「アカちゃんもいる！」と笑顔を見せる子どもたちの様子を観察することができた。

バディ (Buddy) の世話は、6年生の中から有志を募り、当番制で朝の餌やり・排泄の世話、部屋の清掃などを分担して行っている。この6年生たちは、「バディ・ウォーカー」²⁾と呼ばれ、ボランティアグループとしてバディ (Buddy) の学校生活のサポーターとなっている。つまり、「バディ・ウォーカー」の活動は「飼育」ではなく、バディ (Buddy) が学校生活を送るための「お手伝い」をすることを目的としている²⁾。(写真3参照)

例年、25～35名(学年の約半数)が在籍しているが、正式メンバーとなるためには、ドッグトレーナーによるハンドリング講習会を受講し、犬の扱い方や日常のケアについて学ぶことを条件としている。子どもたちは協力しながら大型犬のハンドリングを修得し、初めは悪戦苦闘

しながらも、散歩中の排せつ物の処理やトラブルなどへの対処を行っている。また定期的にドッグトレーナーの指導を受け、簡単な服従訓練などにも積極的に取り組みながら、バディとの信頼関係を築いている。

訪問1日目に、バディ・ウォーカーの子どもたちにインタビューすることができ、どの子どももバディ・ウォーカーになることを心から希望していたこと、「バディは、かわいい」「おしっこやウンチの世話もバディのためなら平気」と、まるで自分の妹や弟のようにかわいがっていることがわかった。

訪問2日目に、新しいバディ・ウォーカーがバディ（Buddy）を散歩に連れ出すのを観察することができた。いつもは喜んで散歩するバディ（Buddy）が職員室を出てすぐのところで座り込み、全く動かなくなった。30kg近くある大型犬が座りこんで動かないと、最高学年とはいえ、小学生女子の手には負えない。吉田氏が来て見ると、リード（引き綱）の掛け方が間違っていることがわかった。「あなたたちのやり方が間違っているから、私は行きません」という毅然としたバディ（Buddy）の態度に驚かされるとともに、その利口さに感心させられた。このように利口なバディ（Buddy）に対応するためには、子どももしっかりと学習しなければならないことを実感した。

資料2は、バディ・ウォーカーだった児童の卒業時の感想文である。ともに過ごした時間の楽しさと、ともに育った豊かな関係性がよく伝わってくる。

資料2

「あと何回、バディとお散歩できるかなあ」そんな気持ちで楽しく過ごしたバディとの時間が終わってしまい、さびしい気持ちでいっぱいです。

バディは「大好きだよ、うれしいよ」といつもかわいいしっぽをふっていました。バディに会うとき「心がやすらぐ」ってこういうことだろうなあと思いました。そして学校という場所でわたしたちと一緒に過ごすために、バディは本当によくがんばっていると思います。バディはたくさん努力し、わたしたちのために大きな働きをしてくれていることを、バディ・ウォーカーになってよく分かりました。おうちに帰ってからきっと思いっきり吉田先生にバディは甘えているんだろうなあと思いました。

そんなバディにわたしは何度も元気をもらいました。泣きたくなったときも、バディの顔をみると、わたしも笑顔になることができました。今、バディに感謝の気持ちでいっぱいです。バディとお別れなんて思いたくありません。バディに会いたくなったら、遊びに行きます。バディ、ありがとう。

（6年生 O.I）

出典：「子どもたちの仲間 学校犬バディ」²⁾

4. 保護者の反応

プログラムの導入当初には、学校が犬を受け入れることに対して保護者の懐疑的な意見もあった。

バディ（Buddy）の初めて参加した大きな学校行事は軽井沢への林間学校（キャンプ）であった。バディ（Buddy）は、昼は森の中での遠足で歩くのが苦手な子どもを励ますよう働き、夜は親元を離れて生活するキャンプでホームシックになりがちな子どもたちを支えた。この学校行事は、子どもたちとバディ（Buddy）の間に大きな信頼関係が確立するできごとだったとい

えよう。

しかし、この行事から間もない夏休み中に保護者から匿名の手紙が寄せられた²⁾。

「動物アレルギーの子どもがいるかもしれない、衛生面でも不安があるのではないか？それなのに、ある特定の子どものためにだけ、学校が犬を受け入れるのはいかがなものか？」という内容であった²⁾。

吉田氏は残念で悲しい気持ちを抑えつつ、全校の保護者宛に「私たち教師はたった一人の子どもであっても絶対に見捨てないこと、バディは特定の子どものためだけでなく、多くの子どもたちの喜びになっていること、衛生面や安全面については最大限の配慮を行っているのをご理解いただきたい」「子どもたちのよりよい成長や育ちを目指す学校と保護者であるからこそ、匿名での手紙や電話ではなく、お互いに顔を合わせて意見を交わす対話の中でしか、本当によいものは生まれえない」ことを伝えた²⁾。

同時に、吉田氏は、子どもたちとバディ (Buddy) の関係を伝えるためには、現場を見せることが最良の手段という思いを持つようになった。

保護者会で専門職である獣医師の講演、子どもたちとバディ (Buddy) の活動のビデオ映像の紹介、そして愛らしいバディ (Buddy) を登場させ、理解を得ることに成功した。この後も、地道な活動の継続により、多くの保護者が犬を教育の現場に介在させることの効果を実感し、賛同の声が大きくなっている。

訪問中、バディ (Buddy) の子どもを譲り受け家庭で育てている保護者が来校し、バディ・ルームの窓から顔を出し、成長の様子やケアの相談を笑顔でしていた。

また、聖書科 (宗教科) の授業を参観に来た保護者にインタビューをしたが、「うちの子どもが受験したときから、バディ (Buddy) がいましたから、ほんとうに身近で当たり前存在ですね。今日の授業でもバディ (Buddy) は教室でおとなしくしていますし、子どもたちは集中して学習しています。バディ (Buddy) の雰囲気には、おとも癒されますね」と、当然のこととして受け止めていることがわかった。

バディ (Buddy) の「動物介在教育」は、犬が特別なイベントで学校へやってくるのではなく、いつもあたりまえの光景として子どもたちのそばにいる。学校の中を犬が歩いていることが不思議なことではなく自然なこととしていることが、このプログラムをより効果的な取り組みとする上で最も大切なことである。そのことが保護者にもよく理解されていることを把握できた。

5. いることが当たり前

吉田氏が「相棒・仲間・友達」の意味を込めて名づけたバディ (Buddy) は、子どもたちと様々な体験を共有しながら、ほんとうの「相棒・仲間・友達」に育っていった。

吉田氏担当の聖書科 (宗教科) の授業には、バディ (Buddy) が毎時間参加している (写真4参照)。授業の前の休み時間に、当番の子どもたちがバディ (Buddy) を迎えに来る。授業のはじめに、バディ (Buddy) は子どもたちは一人一人のもとを周って、挨拶を交わす。挨拶

の際には、子どもたちはバディの体高に合わせてひざまずき、なでたり言葉をかけたりする。

訪問中、どの子どももバディ (Buddy) がまわってくるのを待ちどおしそうにしていた。バディ (Buddy) とともにアカちゃんも一緒に教室に行った。挨拶の途中で、アカちゃんが勝手な振る舞いをし、バディ (Buddy) が一生懸命叱る場面が見られた。「先生、バディがアカちゃんを噛んでみたい」「だいじょうぶなの?」と心配する児童に対し、吉田氏が悠然と「あのね、バディ (Buddy) はアカちゃんをしつけるために『そんなことしたらだめだよ』と噛んで教えているんだよ。もちろん、けがするような激しい噛み方じゃないよ。でも、もし、ここで噛むのをやめたら、アカちゃんはいくことをきかない、だめな犬に育ってしまうんだよ」と説明していた。相手が小さい子どもであっても、いけないことはいけないとしっかり教えなければならぬ。バディ (Buddy) は正しい子育てを示していたのであった。

挨拶が終わると、バディ (Buddy) は教室の隅に置かれたドッグベットの上で子どもたちの様子を見守っていた。時折、バディ (Buddy) の鼻が聞こえてきたので、見守るだけでなく自らも適度な休息を取りながら、上手に働いていることがわかった。一方、アカちゃんは、サークルできよろきよろちょろちょろしていた。

バディ (Buddy) とアカちゃんがいても、子どもたちの注意力が散漫になるというわけではなく、授業に集中していた。「動物の持つぬくもりを間近に感じることで安心感やリラックス効果が得られ、かえって授業への集中力が高まる」²⁾ことが実感された。

休み時間に教室から教室への移動となると、バディ (Buddy) とアカちゃんのまわりに人だかりができ、どれほどバディ (Buddy) が子どもたちに愛されているかよくわかった。

バディ (Buddy) は、日常の授業や日常の学校生活のみでなく、前項に述べたようなキャンプや保護者会への参加の他、運動会やクリスマス会などにも参加をしている。資料3は、2007年の運動会の参加賞となったハンドタオルであるが、バディ (Buddy) が先頭を切った絵柄となっている(資料3参照)。バディ (Buddy) は、実際に運動会で行進に参加している。また、クリスマス会は立教女学院小学校において一番大きな行事であるが、愛らしいバディとナカイの登場がこの行事を一層盛り上げている(写真3参照)。

資料3 参加賞のハンドタオル



写真1 子どもたちの仲間
バディの本(表紙)



写真2 学校の庭で



写真4 授業中の子どもたちとバディ



写真3 バディ・ウォーカーとお散歩



写真6 バディのあかちゃん



写真5 行事に参加するバディ



写真7 子犬の世話をするバディ・ウォーカー



写真8 子犬とバディ

出典：写真1・5・6：「子どもたちの仲間 学校犬バディ」²⁾

写真2・3・6・7・8：「動物介在教育の試み」⁴⁾

訪問中も、「バディはクリスマスでは、トナカイになるのよ」と子どもたちが誇らしそうに教えてくれた。

吉田氏は「このような学校行事への参加によって、子どもたちとバディの関係がペットと飼主の上下の関係ではなく、友達のような横のつながりを持ち始めていくことに気がついた」⁴⁾。

6. いのちのつながり

吉田氏は、バディ (Buddy) に対して避妊手術を行わずに、犬本来の自然な姿を知ってもらいたいという思いでいた。

バディ (Buddy) が1歳を迎えた頃のある日、教室にバディ (Buddy) の血が数滴落ちていたのを見つけた子どもが「先生！バディがなんか怪我したみたいだよ！」「保健室につれていく？」と大騒ぎになった。急遽、吉田氏は、生理のこと、赤ちゃんを産むためには必要なこと、病気や怪我ではないこと、犬の生理は6カ月周期であることや、妊娠期間が2カ月間であること、犬もいのちをつくりだすことを教えた⁴⁾。

その後、「動物介在教育」というプログラムの学内での認知度が高まり、プログラムが軌道に乗り始めた2006年4月、学校犬バディ (Buddy) は初めての出産に挑戦した。バディは12頭（うち1頭は亡くなる）を出産し、それぞれ生後3週齢と、早い段階から子犬も学校へ登校させ、バディ・ウォーカーの子どもたちを中心としながら、子犬育てを体験させた（写真6・写真7参照）。また、授業の中でも、クラス担任と一緒に、低学年の生活科や総合的な学習の時間を利用して獣医師をゲストティーチャーとして迎え、聴診器で子犬の心音を聞いたり、ワクチンの接種を手伝ったりする体験学習を行った。

子犬の出産という出来事は、子どもたちに、いくら言葉を尽くしても実感することの難しい「いのち」への感性を伝えるものであった。

ぬいぐるみのようにかわいい子犬たちを抱き上げたときのぬくもりや重さは、生きるものあたたかさといのちの重さを、子どもたちに伝えるものであったろう。尊い命を持つ子犬たちは、バディ (Buddy) のお乳を探って必死にお乳を飲み、肛門を舐められて排泄する、母犬の世話なしに生きられないはかない存在である。命の重さとはかなさと、それを守ろうとする愛の大きさと強さに、子どもたちは感動したことであろう。

やがて、愛くるしい子犬たちが日に日に成長し、排泄物の処理の大変さ、自由奔放に振舞う子犬たちの世話に振り回されながらも、子どもたちにとっては「いのち」に触れる忘れられない貴重な体験となったことが考えられた。学校犬バディ (Buddy) の出産は、まさに「いのち」を実感する取り組みである。

資料4には、母犬とともに子育てに悪戦苦闘しながらいのちの大切さを実感する子どもの心と、自分を育ててくれた母親への感謝の気持ちが表れている。

資料 4

<子犬の世話を体験したバディ・ウォーカーの日記より>

20分休み、まず子犬たちを起こします。そしたら子犬たちはオシッコとウンチをします。そしてみんなが終わったかどうか確認します。ここからが戦いです。ウンチはもう強烈にくさいです。子犬たちをケージの中に入れて、掃除が始まります。ウンチをとってペットシーツを取って拭いて…、そして新しいシーツをしきます。そうしたら、子犬たちをケージから出して20分休みは終わり。子犬たちはバディのところに行ったらお乳を飲むのですが、バディは嫌そうな顔をするので、かわいそうだと思います。

そして、お昼休み。また子犬たちを起こします。そして作ったご飯をあげます。そしたら子犬たちは一斉にパターと駆けつけてきて、手をお皿に突っ込みながら食べるので、「食欲あるなあ」と思いました。そしてご飯を食べ終わると、子犬たちは体中、餌で汚れています。だから私たちは1頭ずつ、濡れたタオルで拭きます。私は子犬たちの食器洗いをしました。その後は…、ウンチとオシッコです。これも20分休みと同じように片付けました。バディは子犬たちがご飯を食べている間、小さなケージの中でご飯を食べていたので、またかわいそうと思えました。「バディこれからがんばってね。お母さんって大変だね」

(6年 H.E)

出典：「子どもたちの仲間 学校犬バディ」²⁾

吉田氏は、教員や子どもたちから他の犬種の犬をどこかから買ってくるのではなく、後継犬にはバディ (Buddy) と血のつながった犬がいいという強い希望に応え、バディ (Buddy) の後継犬を残すこととした。2009年、バディ (Buddy) は、二度目の出産に挑戦した。

エアデール・テリアの平均寿命は12～14年であり、6歳となったバディ (Buddy) は、犬の人生でいえばちょうど折り返し地点を過ぎようとしていた⁴⁾。

吉田氏は、思案の末、6年生の授業では獣医師の協力のもと、バディ (Buddy) の妊娠中に教室で超音波検査を行い、お腹の中の胎児を見ることができた。また、出産直前の巣づくり行動、出産シーンでは子犬を包んでいる羊膜をはがし、へその緒を上手に噛み切って、産まれたばかりの子犬を舐めてやりながら呼吸を促す様子などをビデオ撮影し、「いのち」の誕生の瞬間を子どもたちと共有した。全クラスの授業にバディを連れて行き、子どもたちみんなにバディ (Buddy) が授乳する様子などを見せた (写真8参照)⁴⁾。

グビグビッと大きな音を立ててお乳を飲む子犬たちの懸命に生きようとする姿や、我が子を慈しむような眼差しで見つめる母親としてのバディ (Buddy) から、彼女たちは多くのことを感じ、学んだことだろう。授業が終わり、教室を後にするバディ (Buddy) と子犬たちに「バディ、ありがとうね！」と声をかける子どもたちの優しい声に、吉田氏は胸が熱くなった⁴⁾。

こうして二度目の出産で誕生した5匹のうち、アカちゃんがバディ (Buddy) の「後継犬リンクちゃん」として立教女学院小学校に残り、毎日親子で通勤している。「ウンチ疑惑」や修行の日々など、愛らしく愉快な様子をブログ「動物介在教育について」³⁾で目にする事ができる。やんちゃで個性的なリンクちゃんも、バディ (Buddy) に負けないりっぱな学校犬に育っていくことであろう。

IV. 動物介在教育推進の必要性と可能性

これまで、吉田氏の取り組みとパディ（Buddy）の活躍を見てきたが、パディによる「動物介在教育（AAE）」が、子どもの心を癒し、関係性をつくり、いのちの大切さや世話する喜びを実感させる、効果の大きい教育プログラムであることがよくわかった。

しかし、パディ誕生までの過程とパディの日常を支えるために、学校の教職員の誰かが責任を持って面倒をみるという責任の所在を明確にすることが必要であることも把握できた。現在、学校での動物飼育の困難点は「休業中の世話」が大きい⁸⁾が、逆に誰かが責任を持って休業中も世話をすれば解決することである。学校の中の動物好きな先生が中心となって働けば、学校犬の導入は可能である。

また、「動物介在教育（AAE）」にどれほど懐疑的な人であろうとも、実際に活動をみることで賛同者を得られることがわかった。中心となる教員の熱心な取り組みや、周囲への働きかけ、安全への配慮などが必要である。しかし、子どもと動物の信頼し合った関係や子どもと動物の自然な姿を見れば、賛同者は増加するであろう。

「動物介在教育（AAE）」は、人間には無い動物の大きな力に拠るものであり、動物があたりまえのようにその場にいることで、学校は暖かく安全で安心する場所となることがわかった。少し弱くなっていた子どもたちの意欲もみなぎってくることがわかった。

今後、日本において、学校犬の誕生は十分可能であり、改めて「動物介在教育（AAE）」が学校本来の機能を回復させる大きな力となることが考察された。

V. おわりに

吉田太郎氏は、学校は楽しい場所でなければならないという。筆者らも同感であり、子どもにとって学校は楽しく安心できる場所でなければいけないと考えている。

訪問させていただいた立教女学院小学校で、現地調査ということのを忘れるほど、また、おとなであっても、パディ（Buddy）と過ごすのは楽しかった。パディ（Buddy）は人間のことばを語らないが生きる上で大切なことを示してくれ、あたかも偉大な教師のようであった。

吉田氏が「パディ（Buddy）さん」と「さん」付けで呼ぶのを聞き、吉田氏とパディ（Buddy）も「すてきな仲間（同僚）」であると思った。

日本に学校犬のいる学校がたくさんでき、日本中の子どもたちが笑顔で学校に行くのを楽しみにする、そんな日が一日も早く来ることを望んで止まない。

【謝 辞】

お忙しい時期にも関わらず、動物介在教育の様子を間近に見せていただき、快くインタビューに答えていただきました吉田太郎先生に、深く感謝申し上げます。また、ご協力くださいました立教女学院小学校の校長先生はじめ教職員の皆様、保護者および児童の皆様、バディさん、リンクちゃんに心から感謝申し上げます。

【付 記】

本研究は、北方圏学術センターの助成を受けて行われた。

2010年2月、北方圏学術センター（札幌市）で行われた「プロジェクト研究合同成果報告会」において、本研究の一部を報告した。

【引用文献】

- 1) 人と動物の関係学：http://www.cairc.org/j/relation_index.html
- 2) 吉田太郎：子どもたちの仲間 学校犬バディ 動物介在教育の試み，高文研，2009
- 3) 動物介在教育の試み Animal Assisted Education, <http://blog.livedoor.jp/schooldog/>
- 4) 動物介在教育（Animal Assisted Education）の試み，Child Resarch Net 子どもは未来である，<http://www2.crn.or.jp/blog/report/01/50.html>
- 5) DVD 「Animal assisuted Education St.Margaret's Elementary School Buddy 2003-2009」
- 6) Letter from CAIRC：<http://www.cairc.org/e/newsletter/2001/0110/html>
- 7) IAHIO：<http://www.cairc.org/j/relation/paper-15.html>
- 8) 今野 洋子・尾形良子：札幌市における動物介在教育（AAE）の実態と課題—モデル動物介在教育（AAE）の探究—，人間福祉研究，vol.13, pp. 29-42, 2010